

訳注・翻訳

訓讀説文解字注（十六）

森 賀 一 恵

富山大学人文科学研究第 82 号抜刷

2025 年 2 月

訓讀説文解字注（十六）

森 賀 一 恵

「訓讀説文解字注（十五）」に續いて、段玉裁『説文解字注』を訓讀し注を附す。

凡例

『訓讀説文解字注』金冊～匏冊に倣う。説解原文に（一）（二）（三）等の漢數字の番號を附したのは、段注の入るべき箇所を示したもので、説解原文、段注に 1) 2) 3) 等のアラビア數字の番號を附したのは、訓讀者注の被注箇所を示したものである。十三篇上は『繫傳』では缺けている卷二十五に當るが、今本の異同について記す。

十三篇上

（虫部）

54a

蛟，龍屬，無角曰蛟^(一)，从虫交聲^(二)，池魚滿三千六百，蛟來爲之長，能達魚而飛^(三)，置笱水中即蛟去^(四)，

蛟，龍の屬，角無きを蛟と曰ふ，虫に从ふ，交の聲，池魚 三千六百に滿つれば，蛟來たりて之れが長と爲り，能く魚を達いて飛ぶ，笱を水中に置けば即ち蛟去る，

（校）大徐本、祁刻本，「龍屬」を「龍之屬也」に作り，「無角曰蛟」四字無く，「从虫交聲」四字「去」下に在り，「達」を「率」に作り，「飛」上に「而」字無し。

（一）各本「龍之屬也」四字に作る。今『韻會』¹⁾に依りて正す。「龍」なる者は「鱗蟲の長」。

²⁾ 蛟は其の屬。角無きは則ち屬にして而して別也。郭氏『山海經』の傳に曰く「蛇に似て，四腳，細頸，頸に白嬰有り，大なる者は數圍，卵生，子は一二の斛瓮の如し，能く人を吞む」

1) 『古今韻會舉要』平聲下・三肴・交（居肴切）小韻「蛟，説文，龍屬，無角曰蛟，从虫交聲，池魚滿三千六百，蛟來爲之長，能率魚而飛，置笱水中，即蛟去，郭璞云，似蛇四腳細頸，頸有白嬰，大者數圍，卵生，子如一二斛瓮，能吞人，……」。段注本「蛟」説解、段注引く郭『山海經』傳はいずれも『古今韻會舉要』に同じ。

2) 十一篇下 31a 龍部「龍」説解。

と。³⁾ 按ずるに「蛟」或いは「蛟」に作る。⁴⁾ 然れども「蛟」なる者は魚の名。⁵⁾ 其の字相ひ代はらざる也。

(二)『韻會』本に依れば四字此ここに在り。古肴の切，二部。

(三)『韻會』「而」字有り。

(四)「逴」なる者は「先導する也」。⁶⁾「竹を曲げて魚を捕る」を筇と曰ふ。⁷⁾

蛟，若龍而黃^(一)，北方謂之地虯^(二)，从虫离聲^(三)，或云無角曰虯^(四)，

虯，龍の若く而して黄なり，北方は之れを地虯と謂ふ，虫に従ふ，离の聲，或いは云く，角無きを虯と曰ふと，

(一)南都の賦に曰く「夔龍を憚り蛟虯を怖る」，李注『説文』を引きて「蛟虯は龍の若く而して黄なり」と。⁸⁾ 按ずるに李注「蛟」字を誤りて衍す。左思蜀都の賦「或いは蛟虯を藏す」劉注して云ふ「蛟虯は水神也，一に曰く，雌の龍，一に曰く，龍の子」と。⁹⁾ 亦た蛟虯を一物と爲すと謂ふに似たり。然れども上林の賦「蛟龍赤虯」，文穎曰く「龍の子を虯と爲す」，張揖曰く「赤虯は雌龍也」と。¹⁰⁾ 皆な劉説本づく所。張、左の賦皆な蛟虯を一物と謂はざる也。許「离」を謂ひて「山の神」と爲し¹¹⁾，「虯」を「龍の若くして而して黄なり」と爲す。諸家の説と異なれり。司馬相如曰く「赤虯」，楊雄の解嘲に曰く「翠虯、絳虯の將に天に登らんとす」と。¹²⁾ 其の色黄と謂はず矣。

(二)『呂氏春秋』に曰く「黃帝の時，天先ず大虯大蛟を見す」¹³⁾，『史記』封禪書に「黃帝 土德を得，

3)『山海經』中山經・中次一十一山經「荆山之首曰翼望之山，……，颺水出焉，東南流注于漢，其中多蛟」郭注に「似蛇而四脚，小頭，細頸，有白癭，大者十數圍卵如一二石甕，能吞人」。段引く所は『韻會』引く郭璞説に同じ。注1)参照。(『漢書』武帝紀・元封五年「親射蛟江中，獲之」顔注引く郭説は「蛇」下「四」上に「而」字が有るが，その他は『韻會』引く所に同じ)。

4)『禮記』中庸に「鼃黿蛟龍魚鼈生焉」，釋文に「蛟龍，音交，本又作蛟」，阮元校勘記に「石經、南宋石經、岳本、宋監本同，閩、監、毛本蛟作蛟，嘉靖本、衛氏集説同，惠棟校宋本亦作蛟，釋文出蛟龍云，本又作蛟」。

5)十一篇下26a魚部「蛟，海魚也，皮可飾刀」。

6)二篇下2b辵部「逴，先道也」。段注に「道，今之導字，逴，經典假率字爲之」，また十三篇下40b率部に「率，捕鳥畢也」。

7)三篇上4b句部「筇，曲竹捕魚筇也」。

8)『文選』卷4。「憚夔龍兮怖蛟虯」李善注。

9)『文選』卷4。劉逵注。

10)文穎説、張揖説は『文選』卷8李善注、『史記』索隱、正義、『漢書』顔注に見える。

11)十四篇下17b内部「离，山神也，獸形，……，歐陽喬説，离，猛獸也」。

12)『漢書』揚雄傳下。

13)『呂氏春秋』有始覽「二曰，凡帝王者之將興也，天必先見祥下民」下文。今本は「大虯大蛟」を「大蛟大虯」に作る。『漢書』郊祀志上「秦始皇帝既即位，或曰，黃帝得土德，黃龍地虯見」顔注に見える如淳説の引く『呂氏春秋』は段注引く所に同じ。

黃龍、地螭^{あらは}見る」と。地螭の説、其の本は此れ與。螭蛄^か¹⁴⁾に非ざる也。

(三) 丑知の切、古音は十七部に在り。¹⁵⁾

(四) 六字疑ふらくは後人増す所と。許書本と有るに非ず。蓋し既に「虬」下を改めて「角有り」と爲せば、¹⁶⁾ 則ち此ここに注して「角無し」と爲す。

54b

𪚩，龍無角者^(一)，从虫斗聲^(二)，

虬，龍の角無き者，虫に従ふ，斗の聲，

(校)「龍無角」，大徐本、祁刻本「龍子有角」に作る。

(一) 各本「龍の子，有り」に作る者，今『韻會』¹⁷⁾の據る所に依りて正す。然れども『韻會』尙ほ誤りて「子」字を多す。李善 甘泉賦に注して『説文』「虬は龍の角無き者」を引く。¹⁸⁾ 他家引く所「角有り」に作る¹⁹⁾は，皆な誤り也。王逸 離騷、天問に注して「角有るを龍と曰ひ，角無きを虬と曰ふ」を兩言す。²⁰⁾ 高誘『淮南』に注して同じ。²¹⁾ 張揖 上林の賦注²²⁾、『後漢書』馮衍傳注²³⁾、『玉篇』²⁴⁾、『廣韻』²⁵⁾ 皆な曰く「角無きを虬と曰ふ」と。絶えて「龍の子，角有り」の説無し。惟だ『廣雅』「角有るを龜と曰ふ」と云ふは即ち「虬」字，「角無きを𪚩と曰ふ」は即ち「螭」字。²⁶⁾ 其の説乖異す。恐らくは轉寫の譌り，典要と爲さず。

(二) 渠幽の切，三部。

𪚩，它屬也^(一)，黑色，潛於神淵之中，能興雲致雨^(二)，从虫侖聲，讀若茂艸^(三)，𪚩，𪚩或从戾^(四)，
𪚩，它的屬也，黑色，神淵の中に潛み，能く雲を興し雨を致す，虫に従ふ，侖の聲，讀みて茂
艸の若くす，𪚩，𪚩或いは戾に従ふ，

14) 十三篇上 46b「螭，螭蛄也」段注「今之土狗也」。

15) 丑知切（支韻）は今韵古分十七部表では十六部，离聲は古十七部諧聲表では十七部。

16) 下字「虬」説解、段注参照。

17) 『古今韻會舉要』下平十一尤・虬（渠幽切）に「説文，龍子無角者，从虫斗聲」。

18) 『文選』卷 7。「駟蒼螭兮六素虬」李善注。

19) 例えば、『類篇』『集韻』『楚辭補注』離騷注などは『説文』を引いて「龍子有角者」と。

20) 離騷「駟玉虬以乘鸞兮」，天問「有虬龍負熊以遊」注。

21) 覽冥訓「駕應龍，騶青虬」注に「有角為龍，無角為虬」。

22) 『文選』卷 8。「乘鏤象六玉虬」李善注引く張揖注。

23) 馮衍傳下「駟素虬而馳騁兮」注に「虬，龍之無角者也」。

24) 『大廣益會玉篇』虫部第四百一に「虬，奇穆切，無角龍」。

25) 下平二十幽・虬（渠幽切）に「無角龍也」。

26) 『廣雅』釋魚に「龍有角曰龜，龍無角曰𪚩」。

(校) 大徐本、祁刻本、「它」を「蛇」に作り、²⁷⁾「也」、「之中」無く、「雲致雨」を「風雨」に「𧈧」を「𧈧」に作る。

(一)「它」なる者は「虫也、冤曲して尾を垂るる形に象る」。²⁸⁾ 𧈧は即ち其の屬也。

(二) 甘泉、江賦二注に依りて訂す。²⁹⁾『淮南書』に曰く「犧牛粹毛は廟牲に宜し、其れ以て雨を致すに於いては黒𧈧に若かず」、高云く「黒𧈧は神蛇、神淵に潛み、能く雲雨を興す」と。³⁰⁾

(三)「𧈧」各本「𧈧」に譌る。今正す。「𧈧」は艸部に見ゆ。³¹⁾ 侖の聲にして𧈧に讀む者は雙聲也。³²⁾ 十三部は十五部と音轉じて取も近き也。力計の切、大徐は力屯の切。³³⁾

(四)『淮南書』此くの如く作る。

55a

𧈧、海蟲也、長寸而白、可食^(一)、从虫兼聲、讀若𧈧^(二)、

𧈧、海の蟲也、長さ寸にして白し、食す可し、虫に从ふ、兼の聲、讀みて𧈧の若くす、

(一) 按ずるに「𧈧」自り「𧈧」に至る八篆、一類と爲す。皆な介蟲也。其の外に𧈧有り。𧈧は其の小なる者也。「長さ寸にして白し」は其の𧈧を謂ひ、「食す可し」は其の中肉を謂ふ也。『本艸』に所謂る「𧈧雌は蛤に似て而して長扁なり」³⁴⁾、「𧈧」は「𧈧」と音同じ。『玉篇』に曰く「𧈧は小蚌、食す可し」³⁵⁾と。

(二) 按ずるに「𧈧」は戸監の切。³⁶⁾ 則ち當に『玉篇』胡緘の切³⁷⁾に依るべし。古音當に七部に在るべし。大徐、『廣韻』³⁸⁾力鹽の切。³⁹⁾

27) 十三篇下 8b 它部「它、虫也、从虫而長、象冤曲𧈧尾形、……、蛇、它或从虫」段注に「它篆本以虫篆引長之而已、乃又加虫左旁、是俗字也」。

28) 十三篇下 8b 它部「它」説解。上注参照。

29) 甘泉賦については、『文選』『漢書』楊雄傳に「𧈧」の注釋は見えない。江賦は『文選』卷 12。「𧈧」今本李善注は「它」を「蛇」に作るほか、「淵」を「泉」に作るが、これは唐高祖李淵の諱を避けたもの。

30) 齊俗訓。今本高誘注は「能」上に「蓋」字有り。

31) 一篇下 12a 艸部「𧈧、艸也、可呂染留黃、从艸𧈧聲」段注「郎計切、十五部」。

32) いずれも來母。

33) 古十七部諧聲表では侖聲は十三部、𧈧聲は十五部、今韻古分十七部表では力計切（霽韻は十五部、力屯切（諄韻）は十三部。

34)『本艸』の概略は『訓讀說文解字注 金冊』p.378 の艸部注(105) 参照。『重修政和證類本草』卷 22 蟲部下品・馬刀條に「圖經曰、……、𧈧雌似蛤而長扁、……」。

35)『大廣益會玉篇』虫部第四百一に「𧈧、胡緘切、小蚌可食」。

36) 二篇上 14a 口部「口有所銜也、从口兼聲」段注「戸監切、古音蓋在七部」。

37) 注 35 参照。

38) 下平二十四鹽・廉（力鹽切）小韻に「𧈧、蜚𧈧、蟲名、說文作𧈧、海蟲也、長寸而白、可食」。

39) 古十七部諧聲表では兼聲は七部、今韻古分十七部表では戸監切（匣母銜韻）胡緘切（匣母咸韻）は八部、力鹽切（來母鹽韻）は七部。

𧈧，大蛤^(一)，雉入水所^(二)，从虫辰聲^(三)，

蜃，大蛤，雉水に入りて^(二)する所，虫に从ふ，辰の聲，

（校）大徐本、祁刻本「大蛤」二字無く，「水所^(二)」を「海化爲蜃」に作る。

（一）『韵會』に依れば此の二字有り。⁴⁰⁾ 羅氏願曰く「月令九月，雀大水に入りて蛤と爲り，十月，雉大水に入りて蜃と爲る，雀化する所に比して大爲り，故に大蛤と稱する也」と。⁴¹⁾ 按ずるに鄭『禮記』に注して曰く「大蛤曰蜃」⁴²⁾，韋『國語』に注して曰く「小は蛤と曰ひ，大は蜃と曰ふ」⁴³⁾，高『呂覽』に注して曰く「蜃は蛤也」⁴⁴⁾と。高は之れを渾言し，鄭、韋は之れを析言す。蜃は蚌と屬と雖も而して別なり。郭『爾雅』に注して云く「蚌は即ち蜃」と。⁴⁵⁾ 蜃の用は『周禮』、『左傳』に詳らかなり。⁴⁶⁾ 玉部に曰く「珖は蜃甲也，物を飾る所以」「璫は蜃の屬」「天子の佩刀は玉の珖 珖の珖，士は璫の珖 珖の珖」と。⁴⁷⁾

（二）五字『廣韵』據る所⁴⁸⁾に依る。各本「雉海に入りて化して蜃と爲る」に作る。按ずるに夏小正「九月，雀海に入りて蛤と爲る，十月，玄雉淮に入りて蜃と爲る」⁴⁹⁾に自る。故に『國語』趙簡子説く所正しく同じ。而して『呂氏』、月令皆な「大水に入る」と言ふ。鄭季秋に於て則ち「大水は海也」と曰ひ，孟冬に於て則ち「大水は淮也」と曰ふ。⁵⁰⁾ 皆な小正に本づきて説を爲す。許⁵¹⁾断じて「雉海に入る」に作らざるを知る矣。

（三）時忍の切，十三部。『玉篇』「𧈧」に作り，「𧈧」部に入る。⁵¹⁾

40) 上十一軫・腎（是忍切）小韻に「蜃，說文，大蛤，雉入海化，从虫辰聲，記月令，雀入大水爲蜃，蚌屬，小曰蜃，爾雅翼，雀入淮爲蛤，雉入海爲蜃，比雀所化爲大，故稱大蛤，……」。

41) 羅願『爾雅翼』卷31 釋魚・蜃條に「蜃，大蛤也，冬月雉入水所化，蓋雀入淮爲蛤，雉入海爲蜃，比雀所化爲大，故稱大蛤也」。今本『爾雅翼』は「雀入大水」を「雀入淮」に，「雉入大水」を「雉入海」に作る。

42) 月令・孟冬「雉入大水爲蜃」注。

43) 晉語九「趙簡子歎曰，雀入于海爲蛤，雉入于淮爲蜃」注。

44) 孟冬紀「雉入大水爲蜃」注。

45) 釋魚「蚌，含漿」注。

46) 『周禮』地官・掌蜃「掌蜃掌斂互物、蜃物，以共闔墻之蜃，……」注「互物，蚌蛤之屬，闔猶塞也，將井椁，先塞下以蜃，禦濕也，鄭司農說，以春秋傳曰始用蜃炭，言僭天子也」，『左傳』成公二年傳「八月，宋文公卒，始厚葬，用蜃炭，益車馬，始用殉，重器備」注「燒蛤爲炭，以瘞墻」。焼いて炭にし墓穴の防湿に用いられた。

47) 一篇上 35b「璫，蜃屬，从王珖聲，禮記曰，佩刀，士璫珖而珖珖」（二徐本は「記曰」二字無し），「珖，蜃甲也，所以飾物也，从王兆聲，禮記曰，佩刀，天子玉珖而珖珖」（二徐本は「記曰」を「云」に作る）。

48) 上十六軫・腎（時忍切）小韻に「蜃，大蛤，說文曰，雉入水所化」。

49) 『大戴禮記』卷2。

50) 月令・季秋「爵入大水爲蛤」孟冬「雉入大水爲蜃」注。

51) 『大廣益會玉篇』𧈧部第四百二に「𧈧，時忍切，亦作蜃，大蛤也」。

55b

蜃，蜃屬^(一)，有三^(二)，皆生於海^(三)，厲，千歲雀所^(四)，秦人謂之牡厲^(五)，海蛤者，百歲燕所^(六)也，魁蛤，一名復蜃，老服翼所^(七)也，从虫合聲^(八)，

蜃，蜃の屬，三有り，皆な海に生ず，厲，千歳の雀^レする所，秦人 之れを牡厲と謂ふ，海蛤なる者は百歳の燕^レする所也，魁蛤，一名復蜃，老服翼^レする所也，虫に从ふ，合の聲，

(校) 大徐本、祁刻本「^レ」をいずれも「化」に作る。また、「厲」、「雀所」無く、「化」下「秦」上に「爲蜃」二字有り、「秦」下に「人」無く、「海蛤者」無く、「百歲」上に「又云」有り、「化」下「魁」上に「也」無く、「蛤」を「蜃」に作り、「化」下「从」上に「也」無し。

(一) 屬にして大小の別有る也。

(二) 下に目す。

(三) 三者は海に生ず。淮に生ずる者に別する也。

(四) 「千」當に「十」に作るべし。雀十歳は則ち老と爲す矣。月令云ふ所の「爵大水に入りて蛤と爲る」也。高誘 時則訓に注して上「賓」字を連ねて讀み，「賓雀なる者は老雀也，人の堂宇の間に棲むこと賓客の如き者」と云ふ。⁵²⁾

(五) 『本艸經』蟲魚上品に「牡蠣」有り。⁵³⁾

(六) 『本艸經』蟲魚部上品に「海蛤」有り。陶隱居云く「細かきこと巨勝の如く潤澤にして光淨なる者を以て好しとす」，圖經云く「久しく爛する者を海蛤と爲し，未だ爛せず文理有る者を文蛤と爲す也」と。⁵⁴⁾ 此れ又た其の一也。

(七) 服翼は蝙蝠也。『爾雅』⁵⁵⁾、『方言』⁵⁶⁾に詳らかなり。釋魚「魁陸」注に曰く「『本艸』に云く，魁 狀は海蛤の如く圓くして厚し，外に理の縱横する有り，即ち今の蚌也」と。按ずるに宋人之れを瓦屋子と謂ふ。今浙人之れを食す。亦た瓦隴子と名づく。其の紋理を以て之れに名づく。此れ其の一也。以上三十二字，今本譌奪有り。『爾雅』音義⁵⁷⁾に依りて正す。

(八) 古沓の切，八部。

52) 季秋之月「賓雀入大水為蛤」注。『淮南子』今本高注は「棲」を「栖」に作り「栖」下に「宿」字有り。

53) 『重修政和證類本草』卷20。

54) 『重修政和證類本草』卷20 海蛤條に「圖經曰，海蛤、文蛤並生東海，今登萊滄州皆有之，陶隱居以細如巨勝潤澤光淨者為海蛤，……，有紫斑文者為文蛤，陳藏器以為，海蛤是海中闌殼久，為風波濤洗，自然圓淨，此有大小而久遠者為佳，……，文蛤是未爛時殼猶有文理者，此乃新舊不同，正一物而二名也，然海蛤難得真爛久者，……」。

55) 釋鳥「蝙蝠，服翼」。

56) 卷8に「蝙蝠，自關而東謂之服翼」。

57) 『爾雅』釋魚「魁，陸」釋文に「魁，苦回反，郭云狀如海蛤，案本草海蛤，一名魁蛤，又有魁蛤，一名魁陸，一名活東，並生東海，說文云，蛤有三，皆生於海，蛤厲千歲雀所化，秦人謂之牡厲，海蛤者，百歲燕所化也，魁蛤一名復蜃，老服異所化」。

56a

𧈧，陞也^(一)，脩爲𧈧，圓爲𧈧^(二)，从虫庫聲^(三)，

𧈧，陞也，脩きを𧈧と爲し，圓きを𧈧と爲す，虫に从ふ，庫の聲，

（校）「陞」，祁刻本同じ，大徐孫刻本「階」に作る。

（一）「陞」各本「𧈧」に作る。今『爾雅』同字⁵⁸⁾，『韻會』「陞」に作る⁵⁹⁾。即ち「蚌」，語の轉也。⁶⁰⁾當に玉部に依りて「玼」に作るべし。「玼は、蚌の聲有る者也」。⁶¹⁾釋魚に曰く「𧈧は𧈧」と。許「𧈧」字無し。故に「𧈧」を先にし而して「陞」を以て之れを釋す。郭云く「今江東蚌の長く而して陝⁶²⁾き者と呼ばて𧈧と爲す」と。陶隱居注『本艸』の「𧈧」也，「𧈧」，音亭，「𧈧」，蒲幸の切。⁶³⁾即ち「𧈧」字。『周禮』鼈人，醢人皆な「𧈧」有り。鄭司農「𧈧は蛤也」と云ひ，杜子春「𧈧は蚌也」と云ふ。⁶⁴⁾「蚌」は即ち「蚌」字。「蚌」「蛤」異なる有り。故に二家の説同じからず。許は杜の説を用ふる也。故に下文之れを受くるに「蚌」を以てす。

（二）『毛詩』の傳に曰く「脩は長」也と。⁶⁵⁾長き者は之れを𧈧と謂ひ，圓き者は之れを𧈧と謂ふ。

（三）蒲猛の切，十一部。按ずるに庫の聲にして讀みて十一部に入る者は支清の合音也。⁶⁶⁾

蚌，蜃屬^(一)，从虫丰聲^(二)，

蚌，蜃の屬，虫に从ふ，丰の聲，

（一）「蚌」當に「𧈧」に作るべし。釋魚に曰く「蚌は含漿」。鄭「鼈人」に注して云「狸物，亦た𧈧刀と謂ふ，含漿の屬」と。⁶⁷⁾按ずるに珠は蚌に出づ。玉部に曰く「玼は蚌の聲有る者」と。⁶⁸⁾

58) 釋魚「𧈧，𧈧」注「今江東呼蚌長而狹者爲𧈧」釋文「𧈧，步禮反，又扶氏反，字林小蛤也」。

59) 上聲二十三に「𧈧，蒲孟切，……，說文陞也，从虫庫聲，脩爲𧈧，圓爲𧈧，……」。

60) 一聲の轉か，「𧈧」「蚌」いずれも並母，また「玼」も並母。

61) 一篇上 35a「玼，珠也，……，宋宏曰，淮水中出玼珠，玼珠，珠之有聲者，蚌，夏書玼从虫賓」，段注に「玼珠珠之有聲者七字，當作玼蚌之有聲者六字，玼本是蚌名，以爲珠名，韋昭曰，玼，蚌也，廣韻曰，蚌，珠母也，西山經，𧈧魴之魚，其狀如覆鉢，鳥首而翼，魚尾，音如磬之聲，是生珠玉，江賦所謂文魴磬鳴，郭傳云，蚌類，按玼蚌蓋類是，能鳴，故曰蚌之有聲者」。

62) 阮元本は「陝」を「狹」に作る。釋文に「陝，乎夾反，本今作狹」。なお，『説文』に「狹」は無い。十四篇下 3b 𧈧部「陝，隘也」段注に「俗作陝、峽、狹」。

63) 『重修政和證類本草』卷 22 馬刀條注に「陶隱居云，……，大都似今𧈧（音亭）𧈧（蒲幸切）而非，……」。

64) 天官。鼈人「祀共𧈧𧈧，以授醢人」注に「鄭司農云，𧈧，蛤也，杜子春云，𧈧，蚌也」釋文「蚌，字又作蚌，蒲項反，又蒲杏反」。醢人「掌四豆之實，……，饋食之豆，其實葵菹，𧈧醢，脾析，𧈧醢，蜃，蜃醢，豚拍，魚醢」注「鄭司農云，……，𧈧，蛤也」。但し，阮元本は「𧈧」を「𧈧」に作る。

65) 小雅・六月「四牡脩廣」，大雅・韓奕「四牡奕奕，孔脩且張」傳。

66) 今韻古分十七部表では清韻は十一部，支韻は十六部，「庫」は早聲，古十七部諧聲表では早聲は十六部。

67) 「以時簪魚鼈龜蜃凡狸物」注「玄謂，狸物，亦謂𧈧刀，含漿之屬」。

68) 注 61 參照。

(二) 歩項の切，九部。

𧈧，蚌屬，𧈧𧈧𧈧大^(一)，出海中，今民食之，从虫萬聲，讀若賴^(二)，

𧈧，蚌の屬，𧈧に似て𧈧や大なり，海中に出づ，今民之れを食す，虫に从ふ，萬の聲，讀みて賴^{ライ}の若くす，

(校)「𧈧」，大徐本、祁刻本「微」に作る。⁶⁹⁾

(一)「𧈧」は即ち上文の「長さ寸にして白き」者。⁷⁰⁾『本艸經』牡蠣條の注に據れば則ち此の物絶だ大なる者有り。⁷¹⁾「𧈧に似て𧈧や大」と云ふを得ざる也。且つ「蛤」下「厲」に作り，「秦は之れを牡厲と謂ふ」と云ふ。蛤の屬に厲有り，蚌の屬に𧈧有るに似たり。其の字必ずしも同じからず。『本艸』を以て牽合するを煩はさざる也。許聞く所或いは後人と盡くは合はず。讀書は盡く信ずるを尊ばず。

(二) 力制の切，十五部。

56b

𧈧，𧈧^(一)，𧈧也^(二)，从虫𧈧聲^(三)，

𧈧，𧈧，𧈧也，虫に从ふ，𧈧の聲，

(一) 此れ篆文を複舉するの未だ刪らざる者也。當に『韵會』⁷²⁾に依りて刪るべし。

(二)「𧈧」なる者は今人用ふる所の「𧈧」字。釋魚に曰く「𧈧𧈧は𧈧𧈧」と。⁷³⁾鄭『周禮』醢人に注して「𧈧は𧈧𧈧」と。⁷⁴⁾許上文「𧈧」下亦た「一に曰く，𧈧は𧈧𧈧」と云ふ。⁷⁵⁾此の物亦た

69) 二篇下 15a イ部「微，隱行也。」段注「𧈧訓眇，微从イ，訓隱行，段借通用微而𧈧不行」，八篇上 19a 人部「𧈧，眇也」(二徐本は「眇」を「妙」に作る)段注「眇各本作妙，今正，……，眇者，小也，引伸爲凡細之稱，微者隱行也，微行而𧈧廢矣」。

70) 55a. p.76 參照。

71) 『政和證類本草』卷 20 蟲魚部上品・牡蠣條に「圖經曰，牡蠣生東海池澤，……，此物附石而生，硨𧈧相連如房，故名𧈧房，讀如何房之房，一名𧈧山，晉安人呼爲𧈧莆，初生海邊，才拳石四面漸長有一二丈者，巖巖如似山海，一房内有𧈧肉一塊，肉之大小隨房所生，大房如馬蹄，小者如人指面，……」。

72) 平上九佳・𧈧(公蛙切)小韻に「𧈧，說文，𧈧，𧈧」，平下六麻・𧈧(姑華切)小韻に「𧈧，說文𧈧也，从虫𧈧聲」

73) 注「即𧈧牛也」。

74) 「饋食之豆，其實葵菹，𧈧醢，脾析，𧈧醢，蜃，𧈧醢，豚拍，魚醢」注。

75) 十三篇上 19a「𧈧，𧈧𧈧也，……，一曰𧈧𧈧」段注「郎果切，十七部」「此謂單言𧈧則謂𧈧𧈧也，𧈧𧈧見下文𧈧篆下，按下文𧈧篆下𧈧也，此當云一曰𧈧也，而云一曰𧈧𧈧者，一物三名，舉其易知者也」。「𧈧」篆說解は「𧈧」を「𧈧」に作る。

「蝸^{クワ}」と名づく。故に『周禮』、『儀禮』⁷⁶⁾の「羸醢」内則⁷⁷⁾は「蝸醢」に作る。二字疊韻⁷⁸⁾にして相ひ轉注なり。薛綜「東京賦」注に曰く「蝸」なる者は「螺也」と。⁷⁹⁾崔豹曰「蝸は陵螺」と。⁸⁰⁾「蝸」本と尙の聲。故に蝸牛或いは瓜牛に作る。⁸¹⁾徐仙民「力戈」を以て「蝸」を切す。未だ得ざるに似たる也。力戈は乃ち「羸」字の反語耳。⁸²⁾今人 水中の食す可き者を謂ひて螺と爲す。陸生の食す可からざる者は蝸牛と曰ふ。想ふに周、漢は此の分別無し。「羸」古へ多く「蠱」を段りて之れと爲す。⁸³⁾

(三) 古華の切、十七部。舊音は當に「過^{クワ}」の如かるべし。此の篆舊と「羸」「蚌」二篆の間に在り。今按ずるに羸は即ち蛭蟥。前文「羸」篆下之れを言ふ。故に移して相ひ聯ら使む。

蛭蟥、虎蟥也^(一)，从虫俞聲^(二)，

蟥，虎蟥也，虫に从ふ，俞の聲，

(一)「虎蟥」は移與二音に讀む。今 牆壁の間の溼處に生ず。殻無く，兩角有り，足無し。地上を延行す。俗に延游と呼ぶ。即ち虎蟥は古語也。『本艸經』「蛭蟥」に作り「一名陵螺」と云ふ。⁸⁴⁾後人又た「蝸牛」一條を出す。⁸⁵⁾本經に據れば則ち蛭蟥は即ち蝸牛。之れを釋蟲⁸⁶⁾及び鄭注『周禮』⁸⁷⁾、許造『説文』に合するに皆な羸と蛭蟥を二と爲すと云はず。蓋し螺の殻無き者、古へ亦

76)『周禮』は上注參照。『儀禮』士冠禮「再醢，兩豆，葵菹羸醢，兩簋栗脯，……」注「羸醢，蛭蟥醢，今文羸為蝸」，士喪禮「東方之饌，……，角觶木枲，駝豆兩，其實葵菹芋羸醢」，既夕禮「東方之饌，四豆，脾析蜚醢，葵菹羸醢」注「今文羸為蝸」，士虞禮「豆實葵菹，菹以西，羸醢簋，棗栗栗擇」少牢饋食禮「主婦被錫衣，……，主婦贊者一人，亦被錫衣移袂，執葵菹羸醢」注「今文錫為錫，羸為蝸」。

77)『禮記』内則「食，蝸醢而苴食雉羹」釋文「蝸，力戈反」。

78)『六書音均表』では蝸（古華切・麻韻）も羸（郎果切・果韻）も十七部，尙聲、羸聲も十七部。

79)『文選』卷3。「供蝸羸與菱芡」注。

80)『古今註』卷中・魚蟲第五「蝸牛，陵螺也，形如蛭蟥，殼如小螺」。

81)『重修政和證類本草』卷21 蟲魚中品・蝸牛條に「陶隱居云，蝸牛，字是力戈反而俗呼為瓜牛」。また『三国志』魏書・胡昭傳注に「時有隱者焦先，河東人也，……，自作一瓜牛廬，……，臣松之案魏略云，……，以為瓜當作蝸，蝸牛，螺蟲之有角者也，俗或呼為黃犢，先等作園舍，形如蝸牛蔽，故謂之蝸牛廬」。

82)内則の釋文は「蝸，力戈反」とする（注77）が，徐仙民の音とは記されていない。『段注攷正』は『匡謬正俗』卷3に「蝸又云，蝸醢而苴食，蝸者羸之類耳，而徐仙等音蝸為羸，亦未為達」とあることを指摘し，「段據是以爲徐音與」という。

83)『周易』説卦傳「離為火，……，為蟹，為羸，……」釋文に「羸，力禾反，京作螺，姚作蠱」。

84)『重修政和證類本草』卷21 蟲魚中品に「蛭蟥，……，一名陵蠱，一名土蝸，一名附蝸，……」注に「陶隱居云，……，其附蝸者，復名蝸牛，……，臣禹錫等謹按蜀本注云，此即蝸牛也，而新附目有蝸牛一條，雖數字不同而主療與此無別，是後人誤剩出之」。今本は「螺」を「蠱」に作る。

85)『重修政和證類本草』卷21 蟲魚中品「蛭蟥」下に「蝸牛」條有り。

86)釋蟲でなく『爾雅』釋魚に「蛭羸，蛭蟥」注「即蝸牛也」。

87)天官・醢人「羸醢」注「羸，蛭蟥」。

た螺と評び。設有る者は正しく蛭蝓と評ぶ。今人の語言は評を分別するに似ざる也。陸佃⁸⁸⁾、寇宗奭⁸⁹⁾ 分別の説、古言古義に非ざるに似たり。

(二) 羊朱の切、古音は四部に在り。⁹⁰⁾

57a

𧈧, 昌也^(一), 从虫昌聲^(二),

蛭, 昌也, 虫に从ふ, 昌の聲,

(校) 大徐本、祁刻本「昌」を「蛭」に作る。

(一)「昌」, 各本「蛭」に作る。篆文を複するに仍りて通ず可からず。攷うるに肉部「昌」下に「小蟲也」と云ふ。⁹¹⁾ 今據りて正す。『韻會』, 『説文』「井中の蟲」也を引く。⁹²⁾ 恐らくは是れ『爾雅』の注に據りて改む。「昌」「蛭」は蓋し古今字。釋蟲⁹³⁾ に「蛭蝓」, 「蝓」本訓は「蟲行く」⁹⁴⁾, 段りて「昌」字に作す耳。⁹⁵⁾ 郭云ふ「井中の小蛭蝓, 赤蟲, 一名子子」⁹⁶⁾ と。『廣雅』に曰く「子子は蛭也」と。⁹⁶⁾ 『周禮』「刺兵は蛭すること無からんことを欲す」注に云く「蛭は掉也, 井中の蟲蛭蛭たるが若きを謂ふ」と。⁹⁷⁾ 『詩』毛傳に曰く「蛭蛭は蜀の兒, 蜀は桑蟲也」と。⁹⁸⁾ 其の引申の義也。今水缸中多く此の物を生ず。俗に之れを之水蛆と謂ふ。其れ變じて蠹と爲る。

88) 『埤雅』卷2 蝓「雀豹古今注曰, 蝓牛, 陵蝓也, 形如蛭蝓, 殼如小螺, 熱則自縣於葉下, 野人為圓舍, 如蝓牛之殼, 故曰蝓舍, 亦曰蝓牛之舍, 然則蛭蝓與蝓牛異矣, 先儒以為蛭蝓無殼, 蝓似蛭蝓而有殼, ……」。

89) 『重修政和證類本草』卷21 蟲魚中品「蛭蝓」條注に「衍義曰, 蛭蝓、蝓牛二物矣, 蛭蝓其身肉止一段, 蝓牛背上別有肉以負殼行, 顯然異矣, 若為一物, 經中焉得分為二條也, 其治療亦大同小異, 故知別類。又謂蛭蝓是蝓牛之老者甚無謂, 蛭蝓有二角, 蝓牛四角, 兼背有附殼肉, 豈得為一物也」。

90) 古十七部諧聲表で兪聲は四部だが, 今韻古分十七部表で羊朱切(虞韻)は五部。

91) 四篇下40a。

92) 上十六銑・蛭(葵亮切)「音與罔同, 説文, 井中蟲, 从虫昌聲, ……」。

93) 正しくは釋蟲でなく釋魚。

94) 十三篇上53a。

95) 釋魚「蛭蝓」注。阮元本は「子子」を「子子」に作る。阮元校勘記に「一名子子, 單疏本、雪牕本同, 注疏本及此本作子子, 非, 疏中同, 今訂正, 釋文, 子, 紀列反, 字林云無右臂, 子, 九月反, 字林云無左臂」。

96) 釋蟲。

97) 考工記・廬人。「鄭司農云, ……、絹讀為悃邑之悃, 悃謂橈也, ……、玄謂, 蛭亦掉也, 謂若井中蟲蛭之蛭」阮元校勘記「謂若井中蟲蛭之蛭, 漢讀考作謂若井中蟲蛭蛭, 云各本衍一之字, 按賈疏云井中有蟲蛭蛭擾然也, 蓋賈本注作蟲蛭蛭, 今疏引注語亦有之字。『周禮漢讀考』卷6 刺兵欲無蝓條に「大鄭本作絹, 易為悃, 悃邑者悃悃也, 鬱抑之兒, 橈之義取此, 鄭君從作蛭之本訓掉, 其掉若井中蟲蛭蛭然也, 蛭蛭即子子, 疊字為名, 各本作井中蟲蛭之蛭, 衍一之字, 説文虫部蛭篆下曰, 蛭蛭也, 今本作蛭也, 脫一蛭字, 云謂若者, 釋其義, 非如讀若釋其音。『漢讀考』では「蛭」字説解は「蛭蛭也」を是としており, 「蛭」字段注と異なる。

98) 豳風・東山「蛭蛭者蠹」傳。阮元本は「蜀」を「蠹」に作り, 「桑」上に「蜀」字無し。阮元校勘記「蠹貌桑蟲也, 閩本、明監本、毛本同, 小字本、相臺本桑上有蠹字, 考文古本同, 案有者是也」。

（二）形聲中に會意有り。狂**兗**の切，十四部。

𧈧，**宛**𧈧也^(一)，从虫**亶**聲^(二)，

𧈧，**宛**𧈧也，虫に从ふ，亶の聲，

（一）「宛」は「轉臥する也」。⁹⁹⁾ 引申して凡そ宛曲の稱と爲す。**宛**𧈧は疊韻。蓋し凡そ蟲の宛曲の狀を謂ふ。『篇』¹⁰⁰⁾、『韻』¹⁰¹⁾ 皆な「**𧈧**𧈧は蚯蚓也」と云ふ。蚓，此の名有りと雖も、而れども許の意に非ず。上文「**𧈧**」は善く曲るの物也。故に之れを承くるに「**𧈧**」を以てす。

（二）常演の切，十四部。

𧈧，**𧈧**𧈧也^(一)，从虫幽聲^(二)，

𧈧，**𧈧**𧈧也，虫に从ふ，幽の聲，

（一）三字句。疊韻也。司馬相如の大人の賦「赤螭青蚪の**𧈧**𧈧蜿蜒たるを驂とす」¹⁰²⁾，宛轉の兒を謂ふ也。按ずるに『篇』¹⁰³⁾、『韻』¹⁰⁴⁾ 皆な「龍の兒」と曰ふ。賦文に依りて訓を爲す耳。許「龍兒」二字有るに非ざる也。

（二）於蚪の切，亦た上聲，三部。『漢書』「蚪」に作る。¹⁰⁵⁾

𧈧，**𧈧**𧈧也，从虫𧈧聲^(一)，

𧈧，**𧈧**𧈧也，虫に从ふ，𧈧の聲，

（一）力幽の切，亦た上聲，三部。

𧈧，臧也^(一)，从虫執聲^(二)，

𧈧，臧也，虫に从ふ，執の聲，

（校）大徐本、祁刻本「臧」を「藏」に作る。

（一）「臧」なる者は「善也」。善は必ず自ら隱す。故に別に「藏」字無し。¹⁰⁶⁾ 凡そ蟲の伏すを

99) 七篇上 27b 夕部。

100) 虫部第四百一「𧈧，市衍切，蚯蚓也」。

101) 上二十阮・婉（於阮切）小韻「𧈧，𧈧𧈧，蚯蚓也，亦作𧈧」。

102) 『史記』司馬相如傳。『漢書』司馬相如傳下は「**𧈧**」を「蚪」「𧈧」を「宛」に作る。

103) 虫部第四百一「**𧈧**，於蚪切，**𧈧**蚪，龍兒，又於糾切」。

104) 下平二十幽（於糾切）小韻に「**𧈧**，**𧈧**𧈧，龍貌，又一糾切」。

105) 注 102 參照。

106) 三篇下 24b 臣部「臧，善也」，段注に「凡物善者必隱於内也，以從艸之藏爲臧匿字始於漢末，改易經典，不可從也」。

蟄と爲す。周南に曰く「螽斯の羽、蟄蟄たり」、傳に曰く「和集する也」と。¹⁰⁷⁾ 其の引申の義也。

(二) 直立の切，七部。

57b

𧈧，青蚨^(一)，水蟲，可還錢^(二)，从虫夫聲^(三)，

蚨，青蚨，水蟲，錢を還す可し，虫に从ふ，夫の聲，

(一) 逗。

(二) 其の事『鬼谷子』、『淮南』萬畢術¹⁰⁸⁾、『搜神記』¹⁰⁹⁾、陳藏器『木艸拾遺』¹¹⁰⁾に見ゆ。未だ今尚ほ此の物有るや否やを知らず。『鬼谷子』に曰く「蚨母の其の子に従ふが若き也，出づるに間無く，入るに朕無く，獨り行き獨り來りて，能く之れを止むる莫し」と。¹¹¹⁾ 此れ青蚨の錢を還すを謂ふ。萬畢、『搜神』説く所と正に合ふ也。而して陶隱居「螻蛄 穴中に在り」を以て之れを釋す。¹¹²⁾ 此れ蚨を誤認し蚨と爲すに由り，遂に『爾雅』「王は蚨蜋」¹¹³⁾を以て注を爲す。『酉陽雜俎』亦た「青蚨，鬼谷子は之れを蚨母と謂ふ」と云ふ。¹¹⁴⁾ 郢書燕説，博學の者尤も免れ難し矣。

(三) 房無の切，五部。

𧈧，𧈧^(一)，詹諸^(二)，呂脰鳴者^(三)，从虫𧈧聲^(四)，

𧈧，𧈧は詹諸，脰を呂て鳴く者，虫に从ふ，𧈧の聲，

(校)「𧈧」，大徐本、祁刻本「𧈧」に作る。

(一) 逗。

107) 螽斯。

108) 『太平御覽』卷 950 蟲多部七・青蚨條に「淮南萬畢術曰，青蚨還錢，……，以其子母各置瓮中，埋東行陰垣下，三日後開之，即相從，以母血塗八十一錢，亦以子血塗八十一錢，以其錢更易市（置子用母置母用子皆自還也）」。

109) 卷 13「南方有蟲，名蚨蜋，一名蚨蜋，又名青蚨，形似蟬而稍大，味辛美，可食，生子必依草葉，大如蠶子，取其子，母即飛來，不以遠近，雖潛取其子，母必知處，以母血塗錢八十一文，以子血塗錢八十一文，每市物，或先用母錢，或先用子錢，皆復飛歸，輪轉無已，故淮南子術以之還錢，名曰青蚨」。

110) 「木」は「本」の誤りか。『重修政和證類本草』卷 22 三十六種陳藏器餘に「青蚨，……，其子著水取以塗錢皆歸本處，……，搜神記曰，南方有蟲，……，取其子歸則母飛來，雖潛取必知處，殺其母塗錢子塗貫用钱則自還，淮南子萬畢云，青蚨一名魚伯，以母血塗八十一錢，以子血塗八十一錢，置子用母，置母用子，皆自還也」。

111) 内捷第三。陶弘景注に「蚨母，螻蛄也，似蛛蜘蛛，在穴中，有蓋，言蚨母養子，以蓋覆穴，出入往來，初無間朕，故物不能止之」。

112) 上注參照。

113) 釋蟲「王，蚨蜋」注「即螻蛄，似蜘蛛，在穴中，有蓋，今河北人呼蚨蜋」。

114) 卷 17 廣動植之二「顛當」條に「爾雅謂之王蚨蜋，鬼谷子謂之蚨母」。

（二）句。𧈧部に曰く「**鼃**」「**鼃**」は「**詹諸也**、其の鳴は詹諸、其の皮は**鼃鼃**、其の行は**鼃鼃**」と。¹¹⁵⁾此れ則ち又た**蟾鼃**と名づく。釋魚「**鼃鼃**は**蟾諸**」¹¹⁶⁾に作る。**鼃鼃**は即ち**蟾鼃**、一語の轉。

（三）攷工記梓人の文。「**𧈧**は項也」¹¹⁷⁾、鄭曰く「**𧈧**もて鳴くは**鼃𧈧**の屬」と。按ずるに**鼃𧈧**は**蟾鼃**と別にして而して屬也。故に下文之れを受くるに「**蝦蟆**」を以てす。¹¹⁸⁾

（四）居六の切、三部。『篇』¹¹⁹⁾、『韻』¹²⁰⁾は「**渠竹の切**」。¹²¹⁾

𧈧、蝦蟆也^(一)、从虫段聲^(二)、

蝦、蝦蟆也、虫に从ふ、段の聲、

（一）「**蝦蟆**」は『本艸經』に見ゆ。¹²²⁾背に黒點有り、身小にして、能く跳び百蟲に接し、解く呬呬聲を作す。舉動極めて急なり。蟾蜍は身大にして、背黒く點無く、疥癩多し。跳ぶ能はず、聲を作すを解せず。行動遅緩なり。**絶然**として二物なり。陳藏器、蘇頌¹²³⁾皆な能く詳しく之れを言ふ。許は此ここに於て但だ「**蝦蟆**」と云ひ、「**蟾鼃**也」と云はず。亦た其の同じきに似て而して異なるを謂ふ。

（二）乎加の切、古音は五部に在り。¹²⁴⁾古へ或いは借りて霞字と爲す。¹²⁵⁾魚蝦の字「魚」に从ふ¹²⁶⁾と別なり。

115) 十三篇下𧈧部 10b「**鼃**、先**鼃**、詹諸也、其鳴詹諸、其皮**鼃鼃**、其行先无、从𧈧先、先亦聲、**鼃**、**鼃**或从𧈧」段注に「虫部曰、**蟾鼃**、詹諸也。一物四名、曰**蟾鼃**、曰**先鼃**、曰詹諸、曰**鼃鼃**。許主名詹諸而詳釋之」、また 11a「**鼃**、**鼃鼃**、詹諸也、詩曰、得此**鼃鼃**、言其行**鼃鼃**」。「**蟾**」段注は「**鼃**」「**鼃**」二篆の説解を併せたか。

116) 釋文「**鼃**、起據反」「**鼃**、音秋」。

117) 四篇下 21a 肉部「**𧈧**」説解。

118) 十三篇下 10b 𧈧部「**𧈧**、蝦蟆屬、从𧈧圭聲」段注に「屬各本作也。今依韵會九佳所據小徐本正。廣韵同」。

119) 『大廣益會玉篇』虫部第四百一「**蟾**、巨六切、蟾蜍也」

120) 入一屋・𧈧（渠竹切）小韻に「**蟾**、説文曰、**蟾鼃**、蟾蜍、以𧈧鳴者也」。

121) 居六切は見母屋韻、渠竹切、巨六切は群母屋韻。

122) 『政和證類本草』卷 22 蟲部下品「蝦蟆」條に「圖經曰、蝦蟆生江湖、今處處有之、腹大、形小、皮上多黒斑點、能跳接百蟲、食之時作呬呬聲、在陂澤間、舉動極急、……、本經云一名蟾蜍、以為一物似非的也、謹按爾雅、**鼃**、起據切、蟾蜍、郭璞注云、似蝦蟆、居陸地、又科斗注云、蝦蟆子也、是非一物明矣、且蟾蜍形大、背上多疥行、極遅緩、不能跳躍、亦不解鳴、多在人家下濕處、其腹下有丹書八字者、真蟾蜍也、……」。

123) 『宋史』藝文志・子類・醫書類に「蘇頌校本草圖經二十卷」が著録されている。佚書だが、『證類本草』に引用がある。

124) 段聲は古十七部諸聲表で五部だが、乎加切（麻韻）は今韵古分十七部表では十七部。

125) 『段注攷正』は例として『史記』天官書「雷電、蝦虹、辟歷、夜明者、陽氣之動者也」を挙げる。

126) 十一篇下 27b 魚部「**𩺰**、𩺰魚也」（二徐は「**𩺰**」を「**𩺰**」に作る）段注に「**𩺰**者今之蝦字、古謂之𩺰魚、如鼃曰鼃魚、……、如爾雅蝦三見、鰕大蝦、則今之蝦也、𩺰蝦、則穢邪頭之魚也、鰕大者謂之𩺰、則今有四脚之魚也、而皆謂之𩺰、豈可合而一之乎、𩺰篆者、長須水蟲之正字、古亦借蝦爲之」「乎加切、古音在五部」。

58a

𧈧，蝦蟆也，从虫𧈧聲^(一)，

蟆，蝦蟆也，虫に从ふ，𧈧の聲，

(一) 莫遐の切，古音は五部に在り。¹²⁷⁾

𧈧，𧈧^(一)，大龜也^(二)，呂胃鳴者^(三)，从虫𧈧聲^(四)，𧈧，司馬相如說，𧈧从𧈧^(五)，

𧈧，𧈧，大龜也，胃を呂て鳴く者，虫に从ふ，𧈧の聲，𧈧，司馬相如說，𧈧は𧈧に从ふ，

(校) 大徐本、祁刻本，「𧈧」二字無し。

(一) 二字各本無し。今補ふ。此れ疊韻を以て名と爲す。角部「𧈧」下に曰く「一に曰く，𧈧也」。¹²⁸⁾未だ何物かを言はず。此れ其の文を蒙け之れを釋して大龜と曰ふ。

(二) 龜の取も大なる者。『爾雅』十龜「二に曰く，靈龜」，注に曰く「涪陵郡 大龜を出す，甲は以て卜す可し，縁は又（又は今の釵字，其の邊 釵に爲す可きを謂ふ也）に中る。瑇瑁に似る。俗に呼びて靈又と爲す。今の大𧈧龜也，一名靈𧈧，能く鳴く」と。¹²⁹⁾ 呉都の賦に曰く「瑇瑁を摸し，𧈧を捫む」と¹³⁰⁾。按ずるに𧈧は瑇瑁と二物也。

(三) 攷工記・梓人文。鄭本「𧈧鳴」に作り，「榮原の屬」と云ふ。賈、馬「胃」に作り，賈「靈𧈧」と云ふ也。按ずるに許は古學を賈侍中に得。故に亦た「胃」に作る。賈説を用ふ矣。¹³¹⁾

(四) 戸圭の切，十六部。𧈧は即移の切。

(五) 𧈧の聲に从ふ也。「𧈧」は十四部に在り。合韻。蓋し『凡將篇』中に載する所の異體なり。

𧈧，𧈧離也^(一)，从虫斬聲^(二)，

𧈧，𧈧離也，虫に从ふ，斬の聲，

(校) 大徐本、祁刻本「斬」を「漸省」に作る。

127) 𧈧聲は古十七部諧聲表では五部だが，莫遐切（麻韻）は十七部。

128) 四篇下 58a 角部「𧈧」説解は「𧈧」を「𧈧」に作る。また「𧈧」段注は「一曰𧈧也」の「𧈧」下に「逗」とし，「一に曰く，𧈧は𧈧也」と讀む。「𧈧」『繫傳』に「臣鎔按爾雅注，𧈧，靈龜也」。

129) 釋魚。阮元本は「又」を「文」に，「瑇瑁」を「𧈧」に，「呼」を「呼」に，「靈又」を「靈龜」に作り，「今」下「𧈧」上に「大」字無し。阮元校勘記に「段玉裁云，文當作又，靈龜當作靈又，又釵古今字，依蜀都賦注華陽國志訂正」。

130) 『文選』卷 5。今本は「𧈧」を「𧈧」に「瑇瑁」を「𧈧」に作る。李善注「𧈧，子規切，𧈧，呼圭切，大龜也」。

131) 阮元本は「胃」を「胃」に作る。注同じ。釋文に「胃鳴，本亦作骨，又作𧈧，干本作骨，云，𧈧屬也，賈馬作胃，賈云，靈𧈧也，鄭云，榮原屬也，不知榮原之屬以何鳴，作骨者恐非也，沈云，作胃為得，亦所未詳，聶音胃，劉本作音，音鹵」，阮元校勘記に「以胃鳴者，唐石經余本嘉靖本同，……，釋文，……，經義雜記曰，說文𧈧大龜也，以胃鳴者，爾雅釋文引字林云，𧈧，大龜，以胃鳴，本說文也，許叔重學於賈景伯，故從賈說作胃，沈重云，作胃為得，賈疏云，不如作𧈧，皆據鄭本也」。

- (一) 三字句。「𧈧」,『史記』、『文選』同じ。『漢書』「漸」に作る。上林の賦 水の族を説きて曰く「蛟龍赤螭, 𧈧𧈧𧈧離」, 司馬彪曰く「𧈧離は魚の名也」, 張揖曰く「其の形狀未だ聞かず」と。¹³²⁾ 按ずるに許此を以て「𧈧」「𧈧」二篆の間に次すれば, 必ず介蟲の類。周人或いは漸離¹³³⁾を以て名と爲すは, 物に取るを假と爲す¹³⁴⁾也。斬𧈧¹³⁵⁾の字或いは「𧈧胡」に作る¹³⁵⁾は非也。
- (二) 慈染の切, 八部。『玉篇』才廉の切。¹³⁶⁾

58b

- 𧈧, 有二敖八足^(一), 旁行^(二), 非它鮮之穴無所庇^(三), 从虫解聲^(四), 𧈧, 𧈧或从魚, 𧈧, 二敖八足有り, 旁行, 它鮮の穴に非ざれば庇る所無し, 虫に从ふ, 解の聲, 𧈧, 𧈧或いは魚に从ふ,
- (校) 大徐本、祁刻本「它」を「蛇」に, 「或」上「𧈧」を「蟹」に作る。祁刻本「鮮」を「鰾」に作る。
- (一)「敖」, 俗に「螯」に作り, 「𧈧」に作る。『廣韻』に曰く「𧈧は蟹の大脚也」「螯は蟹の屬」と。¹³⁷⁾ 然らば則ち俗に「螯」に作るは尤も誤れる也。「敖」は「出游也」¹³⁸⁾。故に其の大脚を敖と曰ふ。今本『大戴禮』「螯」に作る¹³⁹⁾は非。
- (二) 攷工記・梓人「仄行」, 即ち旁行也。鄭亦た「蟹の屬」と云ふ。¹⁴⁰⁾
- (三)「庇」なる者は「蔭也」¹⁴¹⁾。「鮮」なる者は今の「鰾」字。「鰾」なる者は魚の名。魚部に見ゆ。¹⁴²⁾ 魚の蛇に似たる者也。常演の切。又た「𧈧」に作る。今『大戴禮』「𧈧」に作り, 或いは「𧈧」

132) 『文選』卷8。司馬説、張説は李善注引く所。但し、今本『文選』は「𧈧」を「漸」に作る。『史記』司馬相如傳は「𧈧」, 『漢書』司馬相如傳上は「漸」に作る。

133) 高漸離か。

134) 『左傳』桓公六年傳「公問名於申繻, 對曰, 名有五, 有信, 有義, 有象, 有假, 有類, …… , 取於物為假, ……」。

135) 十篇上 39a 鼠部「𧈧, 斬𧈧鼠, 黑身白𧈧若帶, 手有長白毛, 侶握版之狀, 類蝮蛇之屬」段注に「其字或作𧈧胡, 或作𧈧胡, 或作𧈧胡, 或作𧈧胡」。なお, 斬𧈧は上林賦にも見えるが, 『史記』今本は「𧈧胡」に作る。『文選』、『漢書』は「𧈧胡」に作る。

136) 『大廣益會玉篇』虫部第四百一に「𧈧, 才廉切, 𧈧離也」。

137) いずれも下平六豪・敖（五勞切）小韻。

138) 四篇下 5a 放部「敖」説解。また, 六篇下 2b 出部に「敖, 游也」段注に「按此篆當刪, 説見四篇放部」。

139) 勸學篇。段注下文參照。

140) 疏「云仄行蟹屬者, 今人謂之旁蟹, 以其側行故也」。

141) 九篇下 17a 广部「庇」説解。

142) 十一篇下 24a「鰾, 鰾魚也」段注「其字亦作𧈧, 俗作鰾, 或段鮮字爲之, 如鰾篆下云, 非蛇鮮之穴無所庇是也, 或段鰾爲之」。

に誤る。¹⁴³⁾『荀子』「蠃」に作る。¹⁴⁴⁾許書の古本多く「鮮」に作る。蓋し漢人多く貉國鮮魚の字¹⁴⁵⁾を段りて之れと爲す。本と正字無き也。玄應曰く「鰾又た鱗、鮮二形に作る、同じ」と。¹⁴⁶⁾勸學篇に曰く「蟹は二螯八足、蛇鰻の穴に非ざれば寄る所無き者は、心を用ふること躁なれば也」¹⁴⁷⁾と。

(四) 胡買の切、十六部。『廣韻』に曰く「蟹、説文 鰾に作る」と。¹⁴⁸⁾古へ此くの如く作るを知る。

𧈧，鰾也^(一)，从虫危聲^(二)，

𧈧，鰾也，虫に从ふ，危の聲，

(校) 大徐本、祁刻本は「鰾」を「蟹」に作る。

(一) 『廣雅』「蝓蟹は𧈧也，其の雄は蝓鰾と曰ひ，其の雌は博帶と曰ふ」。¹⁴⁹⁾

(二) 過委の切，十六部。按ずるに以上四篆皆な互物¹⁵⁰⁾也。

𧈧，短弧也^(一)，𧈧龜三足^(二)，𧈧氣𧈧害人^(三)，从虫或聲^(四)，𧈧，𧈧又从國^(五)，

𧈧，短弧也，龜に𧈧て三足，氣を𧈧て人を𧈧害す，虫に从ふ，或の聲，𧈧，𧈧又た國に从ふ，

(校) 大徐本、祁刻本「弧」を「狐」に作る。

143) 孔廣森『大戴禮記補注』に「鰾，宋本譌鰾，從盧本改，荀子作蠃」。

144) 勸學篇に「蟹八跪而二螯，非蛇蠃之穴，無可寄託者，用心躁也」。

145) 十一篇下 25a 魚部「鮮，鮮魚也，出貉國」。

146) 玄應『一切經音義』卷 19 佛本行集經第三十卷「魚鰾，又作鱗、鰾二形，同，音善」。「鮮」についての言及は見えない。

147) 今本『大戴禮記』は「寄」下に「託」字有り。

148) 上十二蟹・蟹（胡買切）小韻「蟹」下に「鰾，説文，上同」。

149) 釋魚。

150) 『周禮』天官・鼈人「掌取互物」注に「鄭司農云，互物謂有甲兩胡龜鼈之屬」，地官・掌蜃「掌斂互物、蜃物以共閭壝之蜃」注に「互物，蚌蛤之屬」。

（一）「弧」，各本「狐」に作る。今正す。毛公¹⁵¹、班固¹⁵²、張揖¹⁵³、陸璣¹⁵⁴、杜預¹⁵⁵、范甯¹⁵⁶ 皆な「短弧」と曰ふ。今惟だ五行志¹⁵⁷、『左傳』釋文¹⁵⁸「弧」に作る。誤らず矣。小雅「鬼爲り蜮爲り」，傳に曰く「蜮は短弧也」，『左傳』釋文に曰く「短弧，又た狐に作る」と。按ずるに此れ其の氣を以て人を射し害するに因りて，故に之れを短弧と謂ふ。「狐」に作るは非也。其の氣は矢爲れば，則ち其の體は弧爲り。

（二）洪範傳¹⁵⁹、陸璣疏皆な爾か云ふ。

（三）陸疏に云ふ「人 岸上に在れば，影水中に見る。人の影に投ずれば則ち之れを殺す」と。師古曰く「短弧」は「即ち射工也，亦た水弩と呼ぶ」と。陸氏佃¹⁶⁰、羅氏願¹⁶¹ 皆曰く「口中に横物の角弩の如き有り，人聲を聞き氣を以て矢と爲す。水勢を用ひて以て人を射る。箸く所に隨ひて創を發し，影に中れば亦た病む也」と。

（四）于逼の切，一部。

（五）國の聲は亦た或の聲也。『周禮』蜮氏に「鄭司農云く，蜮は讀みて蝮と爲す，蝮は蝦蟆也，

151) 小雅・何人斯「爲鬼爲蜮」傳に「蜮，短狐也」疏に「洪範五行傳云，蜮，如鼃三足，生於南越」，釋文に「蜮，音或，沈又音域，短狐也，狀如鼃，三足，一名射工，俗呼之水弩，在水中，含沙射人，一云射人影」阮元校勘記に「小字本、相臺本同，案段玉裁云，弧作狐，誤，是也，釋文蜮下云，短狐也，正義云，蜮，短狐，今說文本蜮下皆誤，漢書五行志注作弧，不誤」。

152) 『漢書』五行志下之上「嚴公十八年，秋，有蜮，……，蜮猶惑也，在水旁，能射人，……，南方謂之短弧」注「師古曰，即射工也，亦呼水弩」。『漢書』は顯宗（明帝）の諱を避けて「莊」を「嚴」に作る。

153) 『廣雅』釋魚「射工，短弧，蜮也」。

154) 『左傳』『穀梁傳』疏に見える。注 155, 156 参照。また『後漢書』馬融傳「走蜮祥」注に「詩蟲魚疏曰，一名射景，如鼃三足，今俗謂之水弩也」。

155) 『左傳』莊公十八年經「秋有蜮」注「蜮，短狐也」疏「穀梁傳曰，蜮射人者也，洪範五行傳曰，蜮，如鼃三足，生於南越，……，陸機毛詩義疏云，蜮，短狐也，一名射景，如鼃三足，在江淮水中，人在岸上，景見水中，投入景則殺之，故曰射景，或謂含沙射人，入皮膚，其創如疥」。釋文「蜮，本又作蜮，音或，短弧也，本草謂之射工」「短弧，本又作斷，同，丁管反，弧又作狐，音胡」阮元校勘記に「秋有蜮，釋文蜮本又作蜮，漢書引經文作蜮，說文云蜮短狐也」「蜮短狐也，盧文弨曰，按弧字是也，能含沙射人，故名之短弧，釋文亦作短弧，云，本又作狐，宋本、淳熙本、岳本並作狐，釋文，短，本又作斷」。

156) 『穀梁傳』莊公十八年「秋有蜮」傳「蜮，短狐也」疏に「洪範五行傳云，蜮，如鼃三足，生於南越，……，陸機毛詩義疏云，蜮，短狐，一名射影，在江淮水中，人在岸上，影見水中，投入影則殺之，故曰射影，或謂含沙射人，入皮膚，其瘡如疥。阮元本は「弧」を「狐」に作る。釋文に「有蜮，本亦作蜮，音或，短狐，本草謂之射工」。

157) 注 152 参照。

158) 注 155 参照。

159) 『毛詩』小雅・何人斯、『左傳』『穀梁傳』疏引く。注 150, 154, 155 参照。

160) 『埤雅』卷 11 釋蟲に「蜮，短狐也，似鼃三足，含水射人，一曰含沙射人之影，……，一名射工，一名溪毒，有長角横在口前如弩櫓，臨其角端曲如上弩，以氣爲矢，因水勢以射人，故俗呼水弩」

161) 『爾雅翼』卷 30 釋魚に「蜮，一名短弧，一名射工，一名谿毒，生江南山溪水中，甲蟲之類也，長一二寸，有翼能飛，口中有橫物如角弩，如聞人聲以氣爲矢，激水以射人，隨所著處發瘡，中影者亦病，……」。

月令に曰く、蜩螗鳴くと、故に曰く、鼃黽を去ることを掌ると、鼃黽は蝦蟆の屬」と。『周禮』經注本と此くの如し。今本經「螗氏」に作り、注に「螗は當に蜺に爲るべし」と曰ふ。¹⁶²⁾ 此の譌謬倒易、通ず可からざるの本。¹⁶³⁾ 後鄭司農に依りて字を易ふ。故に注に曰く「螗は今の御に食す所の蛙也、字は虫、國の聲に従ふ。蜺は乃ち短弧¹⁶⁴⁾ 與」と。先鄭字を易ふるの旨を申明する所以也。許は先鄭の説に従はざる者也。故に謂「螗」は即ち「蜺」字の異者、蜺氏「螗」を去るは即ち短弧を去る也。蓋し『周禮』故書「蜺」に作り、亦た或いは「螗」に作る。先鄭は或本に従ふ。許は則ち「螗」は「蜺」と二義無しと謂ふ也。

59a

蜺，但蜺易長一丈^(一)，水潛吞人即浮，出日南也^(二)，从虫𧈧聲^(三)

蜺，蜺易に侶て長さ一丈，水潛し人を吞めば即ち浮く，日南に出づる也，虫に従ふ，𧈧の聲，

(一) 當に「鼃」下に「長さ丈許り」と云ふ¹⁶⁵⁾ に同じかるべし。

(二) 劉 吳都賦に注して曰く「異物志に云く，鰐魚，長さ二丈餘り，四足有り，鼃に似る，喙長さ三尺，甚だ利き齒，虎及び大鹿水を渡れば，鰐之れを撃ち皆な中斷す，子を生めば則ち出で沙上に在りて卵を乳む，卵は鴨子の如く，亦た黃白有り食す可し，其の頭琢み齒を去れば，旬日の間に更めて生ず，廣州之れ有りと」と。¹⁶⁶⁾ 按ずるに劉注に據れば，則ち日南郡乃ち其の物有るを必せざる也。

(三) 吾各の切，五部。俗に鰐、鰐、鰐に作る。

59b

螗，螗蜺^(一)，山川之精物也^(二)，淮南王說^(三)，螗蜺，狀如三歲小兒，赤黑色，赤目，長耳，美髮^(四)，从虫罔聲^(五)，國語曰，木石之怪夔、螗蜺^(六)，

螗，螗蜺，山川の精物也，淮南王の説，螗蜺，狀は三歳の小兒の如し，赤黑色，赤目，長耳，美髮，虫に従ふ，罔の聲，國語に曰く，木石の怪は夔、螗蜺と，

162) 秋官・序官。阮元本は「螗讀爲蜺，蜺蝦蟆也」に作るが，注に「螗當爲蜺」は無い。

163) 『周禮漢讀考』卷5「螗氏注，……，月令曰，蜩螗（當作蜺）鳴，……，玄謂，……，蜺乃短弧（作狐誤）與」下に「司農謂鼃黽蝦蟆屬，至許叔重說文直云，鼃，蝦蟆也，是鼃與蝦蟆不甚別矣，鄭君則顯別鼃與蝦蟆爲二類（漢元鼎五年鼃蝦蟆圖，二物可知），勝於鄭許者一也，司農說文皆謂鼃黽爲一物，鄭君則知鼃與耿黽爲二，此勝於鄭許者二也，司農云，螗讀爲蜺，蜺訓蝦蟆，引月令蜩螗鳴（司農所據禮記蓋作蜩蜺），說文則云，蜺，短弧也，螗同蜺，鄭君則云，螗非蝦蟆，亦非短弧，蜺訓短弧，與螗各字，此勝於鄭許者三也」。

164) 阮元本は「弧」を「狐」に作る。

165) 十三篇下11b 鼃部「鼃，水蟲，但蜺易，長丈所」（二徐本は「丈所」を「大」に作る）段注「所字依太平御覽補，丈所猶丈許也」。

166) 『文選』卷5「鼃鰐鰐」注。今本李善注は「生」下に「子」字無し。

（一）逗。疊韻。

（二）「精物」なる者は『易』に所謂る「精氣は物と爲る」也。¹⁶⁷⁾ 主に精氣結成するの物を謂ふ。鬼部に曰く「彪は老精物也」，或いは「物精」に作る，是に非ず。¹⁶⁸⁾ 「精氣爲物」は精靈の聚まる者を謂ふ。「游覓は變と爲る」は飄敝する者を謂ふ。皆な鬼神の情狀也。『國語』「木石の怪は夔、蜺蝥と曰ひ，水の怪は龍、罔象と曰ふ」，韋注して「蜺蝥は山の精，好く人聲に敦ひ而して人を迷惑する也」と。¹⁶⁹⁾ 杜『左氏』「罔兩」に注して曰く「水の神」と。¹⁷⁰⁾ 蓋し上文「蜺」を「山の神」と訓ずるに因り，故に「罔兩」を訓じて「水の神」と爲す。猶ほ韋『國語』「水の怪」を「龍、罔象」と爲すに因り，故に「蜺」を謂ひて「山精」と爲すがごとき也。許兼ねて山川を言ふを長と爲す矣。又た賈『國語』に注して曰く「罔兩、罔象は，夔龍の形有り而して實體無きを言ふ」と。¹⁷¹⁾ 許「精物」と云ふは殆ど亦た賈説と異れり。

（三）劉安を謂ふ。

（四）玄應の書引きて「赤目」下に「赤爪」二字有り。¹⁷²⁾

（五）文罔の切，十部。按ずるに「蜺蝥」，『周禮』「方良」に作り¹⁷³⁾，『左傳』「罔兩」に作り，孔子世家「罔閭」に作り¹⁷⁴⁾，俗に「魍魎」に作る。

（六）魯語の文。許の意は夔は別に一物と爲す。「龍の如くして一足」なり。¹⁷⁵⁾

蝥，蜺蝥也，从虫兩聲^(一)，

蝥，蜺蝥也，虫に从ふ，兩の聲，

（一）按ずるに兩聲の字，疑ふらくは古へ祇だ「罔」に从ふ。後人之れを改む。良獎の切，十部。¹⁷⁶⁾

167) 繫辭傳上。下文に「遊魂為變」，注に「精氣烟煴，聚而成物，聚極則散，而遊魂為變也，遊魂言其遊散也」。

168) 九篇上 41a 鬼部「彪，老物精也」（二徐本は「老精物也」）段注「各本作精物，今依蕪城賦王莽傳二注正」。

169) 魯語下。季桓子の問いに答える孔子の語に見える。「丘聞之，木石之怪曰夔、蜺蝥，水之怪曰龍、罔象，土之怪曰罔羊」。

170) 宣公三年傳「蜺魅罔兩」注に「蜺，山神，獸形，魅，怪物，罔兩，水神」，疏「魯語賈逵注云，罔兩、罔象言有夔龍之形，而無實體，然則罔兩、罔象皆是虛無當摠彼之意，非神名也」。

171) 『左傳』宣公三年傳疏引く。上注參照。

172) 玄應『一切經音義』卷 2 大般涅槃經第三十七卷「魍魎」，說文蜺蝥從虫，……，淮南說狀如三歲小兒，赤黑色，赤目，赤爪，長耳，美髮也」。

173) 夏官・方相氏「馵方良」注「方良，」罔兩也」。

174) 「丘聞之，木石之怪夔、罔閭」『集解』は『國語』韋注を引く。『索隱』に「閭音兩，家語作魍魎」。

175) 五篇下 37b 爻部「夔，即魍也，如龍一足」段注に「即鉉作神，疑神是」。

176) 七篇下 兩部 39a 「罔，再也，从門，从𠂔，从丨」段注に「良獎切，十部」，39b 「兩，二十四銖爲一兩，从一，罔，罔，罔亦聲」段注に「良獎切，十部」。

60a

𧈧, 善援^(一), 禺屬^(二), 从虫爰聲^(三),

𧈧, 善援, 禺の屬, 虫に从ふ, 爰の聲,

(一) 疊韻を以て訓を爲す。「援」なる者は「引也」¹⁷⁷⁾。釋獸に曰く「獠、𧈧は善援」と。許の意は𧈧は善く攀援するを以て故に𧈧と稱す。𧈧は則ち𧈧の屬^{のみ}而已, 故に𧈧を言はず。

(二) 由部に曰く「禺は母猴の屬」と。¹⁷⁸⁾ 𧈧は即ち其の屬。屬にして而して別也。郭氏『山海經』傳に曰く「𧈧は獠猴に似て而して大なり, 臂脚長く, 便捷, 色黒有り黄有り, 其の鳴聲は哀し」と。¹⁷⁹⁾ 柳子厚「猴は性躁にして𧈧は性緩なり」と言ふ。¹⁸⁰⁾ 二者迥かに異なる。

(三) 兩元の切, 十四部。『干祿字書』に曰く「獠」は「俗」, 「𧈧」は「通」, 「𧈧」は「正」と。¹⁸¹⁾

𧈧, 禺屬^(一), 从虫翟聲^(二),

𧈧, 禺の屬, 虫に从ふ, 翟の聲,

(一) 亦た母猴と屬にして而して別也。按ずるに『爾雅』釋獸「麋」「鹿」自り「闕泄」に至るまで目して「禺の屬」と爲す。此れ下篇の釋𧈧¹⁸²⁾に對して之れを言ふ。「𧈧」なる者は人の養ふ所也。「禺の屬」なる者は皆な寄¹⁸³⁾りて野に在り人に養はれざる者。而して淺者即ち『説文』に所謂「禺の屬」と謂ふ。何ぞ其れ謬れる哉。獠、𧈧、𧈧父は禺の屬と謂ふ可し。豈ぞ其の他も亦た禺の屬と謂ふ可き乎。上林の賦「蛭蚘𧈧𧈧 其の間に棲息す」郭樸云く「𧈧獠は獠猴に似て而して黄なり」と。¹⁸⁴⁾ 𧈧、獠は二物。郭併せて之れを言ふは非也。惟だ『史記』「𧈧」に作り、『漢書』譌りて「𧈧」に作る。司馬貞曰く「西山經, 皋塗の山に獸有り, 名は𧈧」と。¹⁸⁵⁾ 是れ此の字。攷うるに其の説く所の狀, 𧈧猴の類に非ず。其の字, 今譌りて「𧈧」に作る。郭

177) 十二篇上 44a 手部「援」説解。

178) 九篇上 43a

179) 南山經「曰堂庭之山, 多棗木, 大白猿」注。今本は「𧈧」を「猿」, 「其鳴」を「鳴其」に作る。

180) 柳宗元・憎王孫文に「猿之德靜以恒, ……」, 王孫之德躁以𧈧, ……」。また、『埤雅』卷 4 釋獸「猴」條に「柳子曰, 猴類仁讓孝慈, ……」, 猴之德勃譁號呶, ……」, 「𧈧」條「或曰, 猴性躁急, 𧈧性靜緩」。

181) 平聲「猿𧈧𧈧, 上俗, 中通, 下正, 今不行」。

182) 阮元本は「釋畜」に作る。釋文「釋畜第十九」下に「許又反, 本又作𧈧, 音同, 字林云𧈧産也, 説文云𧈧牲也, 經典並作畜字, 禮記左傳皆云, 名子者不以畜牲, 左氏又云, 古者六畜不相為用, 是也, 案釋獸、釋畜二篇俱釋獸而異其名者, 畜是畜養之名, 獸是毛蟲摠號, 故釋畜唯論馬牛羊雞犬, 釋獸通説百獸之名」十四篇下 18b 𧈧部「𧈧, 獸牲也」段注に「𧈧今多用畜者, 俗書段借而然, 爾雅釋獸釋𧈧必異其名者, 陸德明曰, 𧈧是𧈧養之名, ……」。

183) 七篇下 13a 宀部「寓, 寄也」。

184) 『史記』司馬相如傳『集解』引く。

185) 今本『史記索隱』には「顧氏云, 𧈧音塗卓反, 山海經曰, 皋塗山下有獸, 似鹿, 馬足人首, 四角, 名為𧈧, 𧈧獠即此也, 字作𧈧」と見える。

注に依れば則ち當に「獼」に作るべし。¹⁸⁶⁾ 未だ取りて證と爲す可からざる也。

(二) 直角の切，二部。司馬貞曰く「字林，音狄」。¹⁸⁷⁾

𤝵，如母猴^(一)，印鼻長尾^(二)，从虫隹聲^(三)，

雌，母猴の如くして，印鼻長尾，虫に从ふ，隹の聲，

(一) 猶は禺の屬と言ふがごとき也。「禺」なる者は「母猴の屬」。¹⁸⁸⁾ 許書多く「母猴」を言ふ。母猴、獼猴、沐猴は一聲の轉。¹⁸⁹⁾ 『周禮』「雌彝」，鄭曰く「雌は禺の屬」と。¹⁹⁰⁾

(二) 釋獸の文也。「印」なる者は「望み，庶及する所有らんと欲する也」。¹⁹¹⁾ 張揖 上林に注して曰く「雌は母猴に似て印鼻にして長尾なり」と。¹⁹²⁾ 郭『爾雅』¹⁹³⁾、『山海經』¹⁹⁴⁾ に注して皆な曰く「獼猴に似て，尾長さ數尺，岐有り。鼻露れ上に向く。雨ふれば即ち自ら樹に縣り，尾を以て鼻を塞ぐ」と。

(三) 余季の切，十五部。按ずるに『山海經』の注に曰く「音遺，又音誅」と。¹⁹⁵⁾ 『爾雅』に注して曰く「零陵南康人は餘と呼び，建平人は相ひ贈遺すの遺と呼ぶ，又た音余救の切，皆な土俗の輕重同じからざる耳」と。¹⁹⁶⁾ 左思 吳都の賦 劉注『異物志』を引きて「狄」を説く¹⁹⁷⁾ は郭「雌」を説くと同じ。「狄」は「余幼の切」。正に「雌」「余救」の一切有るに因りて別に字を製る^{のみ}耳。『異物志』は譙允南作所。¹⁹⁸⁾

186) 今本『山海經』西山經は「名獼」を「名曰獼如」に作る。「獼」郭注に「音猥嬰之嬰」。『爾雅』釋獸「獼父善顧」郭注に「獼獼也，似獼猴而大，色蒼黑，能獼持人，好顧盼」。

187) 『史記』司馬相如傳「蛭蝮蠃螬」索隱に「字林，蠃，音狄」。

188) 注 178 參照

189) いずれも明母。

190) 春官・司尊彝。鄭注下文に「印鼻而長尾」。

191) 八篇上 42a 匕部「印，望也，欲有所庶及也」段注に「鉉無也，非，印與仰義別，仰訓舉，印訓望，今則仰行而印廢，且多改印爲仰矣」。

192) 『文選』卷 8 李善注、『史記』司馬相如傳索隱、『漢書』顏注引く。顏注引く所「似」を「如」に作る。

193) 釋獸「雌，印鼻而長尾」注「雌，似獼猴而大，黃黑色，尾長さ數尺，似獼尾，末有岐，鼻露向上，雨即自縣於樹，以尾塞鼻，或以兩指」。

194) 中山經「曰崑崙山，……，多猿雌」注「似獼猴，鼻露上向，尾四五尺，頭有岐，蒼黃色，雨則自縣樹，以尾塞鼻孔，或以兩指塞之」。

195) 西山經「曰崑崙之山，……，有鳥焉，其狀如鵠而人面，雌身犬尾，……」注に「雌，獼猴屬也，音贈遺之遺，一音誅」。

196) 今本『爾雅』郭注には見えない。『後漢書』馬融傳「尾蒼雌」注に，『爾雅』「雌」條經注引用に續いてこの説が見える。

197) 『文選』卷 5。「狄蹠猥然」劉淵林注に「異物志曰，狄，猿類，露鼻，尾長四五尺，居樹上，雨則以尾塞鼻，……，狄，余幼の切」。

198) 『三國志』蜀書・譙周傳「字允南，巴西西充國人也」。

60b

𧈧，北方有𧈧犬食人^(一)，从虫句聲^(二)，

𧈧，北方に𧈧犬の人を食ふ有り，虫に从ふ，句の聲，

(一) 海内北經「𧈧犬は犬の如くして青し。人を食するに首従り始む」，郭注して「𧈧，音陶，或いは𧈧に作る，音鉤」と。按ずるに「𧈧」に作るを是と爲す。正しく許本づく所也。『周書』に「渠搜は𧈧犬を以てす」「能く飛び虎豹を食ふ」と。¹⁹⁹⁾「𧈧」は「𧈧」に同じ。𧈧𧈧の字²⁰⁰⁾を借りて之れと爲す耳。『大戴禮』「渠搜は虚犬を貢す」に作る。²⁰¹⁾「虚」亦た音の轉也。今本『周書』「𧈧犬」に作る。『文選』王融曲水詩の序²⁰²⁾に依りて正す。

(二) 古厚の切，四部。

𧈧，𧈧𧈧獸也^(一)，一曰秦謂蟬蛻曰𧈧^(二)，从虫珣聲^(三)，

𧈧，𧈧𧈧は獸也，一に曰く，秦は蟬蛻を謂ひて𧈧と曰ふ，虫に从ふ，珣の聲，

(一) 四字句。子虚²⁰³⁾、上林²⁰⁴⁾の賦皆な「𧈧𧈧」有り。張揖曰く「𧈧𧈧は青獸，狀は馬の如し」。按ずるに『史記』は「邛邛」に作る。²⁰⁵⁾

(二) 方俗の殊語也。「𧈧」の言は空也。

(三) 渠容の切，九部。

𧈧，鼠也^(一)，一曰西方有獸，前足短，與𧈧𧈧巨虚比，其名曰𧈧^(二)，从虫厥聲^(三)，

𧈧，鼠也，一に曰く，西方に獸有り，前足短く，𧈧𧈧巨虚と比ふ，其の名を𧈧と曰ふ，虫に从ふ，厥の聲，

(一) 當に「𧈧鼠也」三字句に作るべし。鼠の名。此れ蓋し『呂氏春秋』「𧈧は鼠前兔後」²⁰⁶⁾の説を用ふ。

199) 『汲冢周書』王會解は「𧈧」を「𧈧」に作る。

200) 十篇上鼠部「𧈧，精𧈧鼠也」段注に「爾雅謂之𧈧鼠，郭注，小𧈧𧈧也，……，漢書東方朔傳如淳注曰，𧈧𧈧，小鼠也，音精劬，據爾雅釋文，字林有𧈧字」。

201) 少閒「海外，肅慎、北發、渠搜、氐羌來服」注に「渠搜貢露犬」。孔廣森『補注』本は「虚」を「露」に作る。

202) 『文選』卷46。「露犬」注に「周書曰，……，又曰，渠搜獻𧈧犬，𧈧犬，露犬也，能飛食虎豹」。

203) 「𧈧𧈧，𧈧距虚」。『文選』卷7郭注に「張揖曰，𧈧𧈧，青獸，狀如馬，距虚，似羸而小，善曰，說苑，孔子曰，𧈧𧈧距虚見人將來，必負𧈧以走，二獸者非性心愛𧈧也，為得甘草而貴之故也」，『漢書』司馬相如傳上注も張説、郭説（「距虚即𧈧𧈧，變文互言耳」）を引き「據爾雅文，郭說是也」という。

204) 「𧈧𧈧驪騮」。『文選』卷8、『史記』司馬相如傳、『漢書』司馬相如傳上。

205) 『史記』司馬相如傳・子虚賦「𧈧邛邛，𧈧距虚」。『集解』に「郭璞曰，邛邛，似馬而色青，距虚即邛邛，變文互言之，穆天子傳曰，邛邛距虚，日走五百里也」。但し，上林賦は「𧈧𧈧」に作る。

206) 慎大覽・不廣「北方有獸，名曰𧈧，鼠前而兔後，趨則跲，走則顛，常為𧈧𧈧距虚取甘草以與之」。

（二）釋地に曰く「西方に比肩獸有り焉、^{キョウキョウキョウキョウ}邛邛距虚と比び、邛邛距虚の為に甘艸を齧り、即ち難有れば、邛邛距虚負ひて走る。其の名は之れを𪔐と謂ふ」と。²⁰⁷⁾ 按ずるに司馬相如の賦に曰く「蛩蛩を齧り、距虚を犇む」、張揖曰く「蛩蛩、狀は馬の如し、距虚は羸に似て而して小なり」と。²⁰⁸⁾ 『説苑』亦た「二獸」と云ふ。²⁰⁹⁾ 而して郭璞「距虚は即ち邛邛、文を變へ之れを互言す」と云ひ『穆天子傳』を引きて「邛邛距虚は日に五百里前む」と。²¹⁰⁾ 「邛」「距」は雙聲。²¹¹⁾ 郭説長ずるに似たり。

（三）居月の切、十五部。

61a

𪔐, 蝙蝠^(一), 服翼也^(二), 从虫扁聲^(三),
蝠, 蝙蝠, 服翼也, 虫に从ふ, 扁の聲,
(校) 大徐本、祁刻本「服翼」二字無し。

(一) 逗。

(二) 「服翼」二字舊と「蝠」篆の下に在り。今全書の通例に依りて此ここに移す。「蝙蝠は服翼」は釋蟲²¹²⁾の文。『方言』に曰く「蝙蝠, 關自り而東は之れを服翼と謂ひ, 或いは之れを飛鼠と謂ひ, 或いは之れを老鼠と謂ひ, 或いは之れを僂鼠と謂ふ。關自り而西、秦隴の間は之れを蝙蝠と謂ひ, 北燕は之れを蠛蠓と謂ふ」と。²¹³⁾ 音, ^{シヨクボク}職墨。

(三) 布懸の切, 古音は十二部に在り。²¹⁴⁾

蝠, 蝙蝠也, 从虫畱聲^(一),
蝠, 蝙蝠也, 虫に从ふ, 畱の聲,
(校) 大徐本、祁刻本, 「蝙蝠」下「也」上に「服翼」二字有り。

207) 阮元本は「𪔐」を「𪔐」に作る。釋文「𪔐, 郭音厥, 孫居衛反」。

208) 子虚賦。『文選』卷7、『漢書』司馬相如傳上注引く。

209) 卷6復恩に「孔子曰、北方有獸其名曰𪔐、前足鼠、後足兔、是獸也、甚矣其愛蛩蛩巨虚也、食得甘草必齧以遺蛩蛩巨虚、蛩蛩巨虚見人將來、必負𪔐以走、𪔐非性之愛蛩蛩巨虚也、為其假足之故也、二獸者亦非性之愛𪔐也、為其得甘草而遺之故也」。

210) 注205参照。

211) いずれも群母。

212) 正しくは釋鳥の文。

213) 卷8。今本は「僂」を「𪔐」に作る。戴震『方言疏證』は「僂」に作り、「今方言各本僂譌作𪔐、據爾雅疏所引訂正」という。阮元本『爾雅』疏引く『方言』は「𪔐」に作り、校勘記に「閩本毛本𪔐改僂」という。

214) 扁聲は古十七部諸聲表で十二部だが、布懸切（先韻）も今韻古分十七部表で十二部。

(一) 方六の切，古音は一部に在り。²¹⁵⁾

𧈧，南蠻^(一)，它種，从虫^(二)，絲聲^(三)，

蠻，南蠻，它の種，虫に从ふ，絲の聲，

(校) 大徐本、祁刻本「它」を「蛇」に作る。

(一) 職方氏「八蠻」²¹⁶⁾、『爾雅』「九夷、八狄、七戎、六蠻、之れを四海と謂ふ」²¹⁷⁾。王制に云く「南方を蠻と曰ふ」。『詩』角弓²¹⁸⁾「蠻の如く髦の如し」傳に曰く「蠻は南蠻也」，采芑「蠢爾たる荊蠻」傳に曰く「荊蠻は荊州の蠻也」と。²¹⁹⁾

(二) 虫に从ふの所由を説く。其れ蛇の種を以て也。「蛇」なる者は「虫也」。²²⁰⁾ 蠻と閩とは皆な人也。而るに字「虫」に从ふ。故に部末に居る。「貉」²²¹⁾の「豸」末に居り，「狄」²²²⁾の「犬」末に居り，「羌」²²³⁾の「羊」末に居るが如し焉。

(三) 莫還の切，十四部。『詩』の傳に「𧈧蠻は小鳥の兒」と曰ひ，²²⁴⁾ 韓詩は「文の兒」と曰ふ。²²⁵⁾

215) 方六切（屋韻）は今韵古分十七部表で三部だが，𧈧聲は古十七部諧聲表で一部。

216) 夏官。注「鄭司農云，……，南方曰蠻，……玄謂，閩，蠻之別也，國語曰，閩羊，蠻矣」。

217) 釋地。注「九夷在東，八狄在北，七戎在西，六蠻在南」。

218) 小雅。

219) 小雅。阮元本は經注ともに「荊蠻」を「蠻荊」に作る。校勘記に「蠢爾蠻荊，唐石經、小字本、相臺本同，案段玉裁云，漢書韋賢傳引荊蠻來威，案毛云荊州之蠻也，然則毛詩固作荊蠻，傳寫倒之也，晉語、後漢書李膺傳、文選王仲宣誄皆可證，見詩經小學，今考正義云，宣王承厲王之亂，荊蠻內侵，是正義本作荊蠻，下文皆作蠻荊，後人依經注本倒之，而有未盡也」。『詩經小學』卷17 蠻荊「漢書韋元成傳作荊蠻來威，今按毛云，荊州之蠻也，然則毛詩固作荊蠻，傳寫誤倒易之，非也，又按晉語叔向曰，楚爲荊蠻，韋注荊州之蠻，正用毛傳爲說，又按齊語萊莒徐夷吳越，韋注徐夷，徐州之夷也，此可證荊蠻文法，又按吳都賦跨躡蠻荊，李善注引詩蠢爾荊蠻，然則唐初詩不誤，左思倒字以與并精珣爲韻，又按後漢李膺傳應奉疏曰，緄前討荊蠻均吉甫之功，毛刻不誤，汪文盛本譌倒作蠻荊，注引蠻荊來威者，俗人所改易也」。

220) 十三篇下8b 它部「它，虫也，……，蛇，它或从虫」。

221) 九篇下43a「貉，北方貉，豸種也」段注に「貉貉二篆各本在犴篆之後，貍貍篆之前，今以虫部之蠻閩，次於以虫爲象之末，犬部之狄，次於犬末，羊部之羌，次於羊末，人部之僇，次於人末，大部夷字，次於大末，依類求之，移易次此，必有合乎古本矣」。

222) 十篇上33b「狄，北狄也，本犬種」(二徐本は「北」を「赤」に作る)。段注本では「狄」が犬部末尾に移されていない。

223) 四篇上35b「羌，西戎，羊種也，……，南方蠻閩从虫，北方狄从犬，東方貉从豸，西方羌从羊，此六種也」(大徐本は「羊種」を「牧羊人」に作り，小徐本は「從羊人」に作る)。やはり，羊部末は「羌」篆。

224) 小雅・𧈧蠻傳。阮元本は「兒」を「貌」に作る

225) 『文選』卷46 王融・三月三日曲水詩序「新萍泛汜，華桐發岫，雜天采於柔蕘，亂嚶聲於縣羽」注「毛詩曰，……，又曰，縣蠻黃鳥，薛君注曰，縣蠻，文貌」。『後漢書』儒林傳下に「薛漢，字公子，淮陽人也，世習韓詩，父子以章句著名，……，杜撫，字叔和，犍爲武陽人也，少有高才，受業於薛漢，定韓詩章句」。『隋書』經籍志に「韓詩二十二卷（漢常山太傅韓嬰，薛氏章句）」が著録されている。

61b

閩，東南越^(一)，它種，从虫門聲^(二)，

閩，東南越，它的種，虫に从ふ，門の聲，

（校）大徐本、祁刻本「它」を「蛇」に作る。

（一）『釋名』に曰く「越は夷蠻の國也，禮義を度越し，拘る所無き也」と。²²⁶⁾ 職方氏「七閩」，鄭司農「南方を蠻と曰ふ」と曰ひ，後鄭「閩は蠻の別也」と曰ひ『國語』「閩𧈧は蠻なり」を引く。²²⁷⁾

（二）武巾の切，古音は十三部に在り。²²⁸⁾ 月令注段りて𧈧字²²⁹⁾と爲す。²³⁰⁾

𧈧，蟬蛸也^(一)，狀似虫^(二)，从虫工聲^(三)，明堂月令曰，虹始見^(四)，𧈧，籀文虹，从申^(五)，申，電也^(六)，

虹，蟬蛸也，狀虫に似る，虫に从ふ，工の聲，明堂月令に曰く，虹始めて見ると，𧈧，籀文の虹，申に从ふ，申は電也，

（校）「似虫」，大徐本、祁刻本「似蟲」に作る。「𧈧」，大徐本「𧈧」に，祁刻本「𧈧」に作る。²³¹⁾

（一）釋天に曰く「蟬蛸は之れを雩と謂ふ，蟬蛸は虹也」と。毛傳同じ。²³²⁾

（二）「虫」，各本「蟲」に作る。今正す。「虫」なる者は它也。²³³⁾ 虹は它に似る。故に字「虫」に从ふ。

（三）戸工の切，九部。

（四）季春の文。²³⁴⁾

（五）會意。申部に曰く「𧈧は籀文の申」と。²³⁵⁾

（六）「電」なる者は「陰陽激耀也」。²³⁶⁾ 虹之れに似たり。取りて以て會意す。

226) 釋州國。

227) 夏官。注 216 參照。

228) 門聲は古十七部諸聲表では十三部だが，武巾切（眞韻）は今韵古分十七部表では十二部。

229) 十三篇下 3a 𧈧部「𧈧，𧈧人飛蟲，……，𧈧，𧈧或从昏，呂昏時出也，蚊，俗𧈧，从虫从文」，十三篇上 52a 虫部「𧈧，秦晉謂之𧈧，楚謂之𧈧」。

230) 仲秋之月「羣鳥養羞」注に「白鳥也者謂閩𧈧也」。

231) 十四篇下 32a 「申，神也，七月会气成體自申束，……𧈧，古文申，𧈧，籀文申」（二徐本は「𧈧」を「𧈧」に作る。段注本は「陳」篆下の「古文陳」、「虹」篆下の「籀文虹」の字形を根據に改める）。段玉裁は古文の申でなく籀文の申に従う形に改めている。

232) 鄘風・蝦蛸「蝦蛸在東」傳「蝦蛸，虹也」。阮元本は「蟬」を「蝦」に作る。釋文に「蝦蛸，上丁計反，下都動反，爾雅作蟬蛸，音同」。

233) 十三篇下 8b 它部「它，虫也，……，蛇，它或从虫」。

234) 鄭注「蟬蛸謂之虹」。釋文「虹，音紅，又音絳，蟬蛸也」「始見，賢遍反」。

235) 十四篇下 32a 「申，神也，七月会气成體自申束，……，𧈧，籀文申」。

236) 十一篇下 10b 雨部「電，𧈧易激耀也」（二徐本は「𧈧易」を「陰陽」に作る）。十一篇下 16a 雲部「𧈧，雲覆日也」段注に「今人陰陽字，小篆作𧈧易」。

𧈧，𧈧𧈧^(一)，虹也^(二)，从虫帶聲^(三)，

𧈧，𧈧𧈧は虹也，虫に从ふ，帶の聲，

(一) 逗。雙聲。

(二) 「虹」篆と轉注なり。

(三) 都計の切，十五部。今『詩』は「𧈧」に作り²³⁷⁾，『爾雅』は「𧈧」に作る²³⁸⁾。

𧈧，𧈧𧈧也，从虫東聲^(一)，

𧈧，𧈧𧈧也，虫に从ふ，東の聲，

(一) 多貢の切，『廣韻』平上二聲²³⁹⁾，九部。

𧈧，衣服、歌𧈧、艸木之怪謂之𧈧，禽獸蟲蝗之怪謂之𧈧^(一)，从虫辟聲^(二)，

𧈧，衣服、歌𧈧、艸木の怪は之れを𧈧と謂ふ，禽獸、蟲蝗の怪は之れを𧈧と謂ふ，虫に从ふ，辟の聲，

(一) 「怪」なる者は「異也」²⁴⁰⁾。「地物に反くを𧈧と爲す」²⁴¹⁾。『漢』五行志²⁴²⁾に曰く「凡そ艸物の類は之れを妖と謂ふ。妖は猶ほ夭胎のごとし。尙ほ微なるを言ふ。蟲豸の類は之れを孽と謂ふ。孽は則ち牙孽。六畜に及べば，之れを𧈧と謂ふ。其の著るを言ふ也。人に及べば，之れを痾と謂ふ。痾は病の兒。𧈧く深きを言ふ也。甚しきは則ち異物生ず。之れを𧈧と謂ふ。外自り來るは之れを祥と謂ふ。祥は猶ほ禎のごとき也。氣相ひ傷ふは之れを𧈧と謂ふ。𧈧は猶ほ臨莅，不和意也」と。許説く所較異なる。蓋し傳ふる所同じからざる有り矣。禽獸、蟲蝗の字は皆な虫に从ふを得。故に「𧈧」は「虫」に从ふ。諸書多く「孽」を用ふ。俗に「𧈧」に作る。

(二) 魚列の切，十五部。

62a

文一百五十三 重十五^(一)

(一) 宋本此くの如し。毛斧季「𧈧」を「𧈧」篆の後に増して「古文の𧈧」と云ひ「十五」を改めて「十六」と爲すは，非也。²⁴³⁾

237) 鄘風・𧈧𧈧。釋文に「𧈧𧈧，上丁計反，下都動反，𧈧𧈧，虹也，爾雅作𧈧𧈧，音同」。

238) 釋天に「𧈧𧈧謂之𧈧，𧈧𧈧，虹也」。

239) 上平一東・東(徳紅切)小韻，上一董・董(多動切)小韻。

240) 十篇下 39b 心部「怪」説解。

241) 一篇上 16b 示部。

242) 中之上。

243) 『汲古閣説文訂』に「初印本𧈧後無𧈧，各本同，今剗補𧈧篆云，古文𧈧，又陰文𧈧之云，在第十四葉𧈧字下，考蟲部𧈧下云，𧈧，古文𧈧，从虫从𧈧，則不當補此滋複」。

使用テキスト

『説文解字注』

嘉慶二十年經韻樓本影印（上海古籍出版社，1981年）

必要に応じて，下の版本を参照

嘉慶二十年經韻樓本影印（藝文印書館，1981年）

皇清經解本

同治六年保息局補刊本

『十三經注疏』

阮元本影印（藝文印書館，1989年）

『經典釋文』

通志堂本

必要に応じて北京図書館藏宋刻宋元遞修本を参照。

本稿はJSPS科研費JP18K00349の助成を受けたものである。

